

童話 雷様の太鼓

内山 憲 堂

高い高い黒雲の上に、お母さんの雷様と、子供の雷様が住んでゐました、子供の雷さまはライちゃんと呼ぶ名前、ハイカラなお名前です。

お母さんが「今日はお天気がいいからお洗濯でもしませう」と云つて、たらひに水を入れて、じやぶじやぶ じやぶ〜おじやぶのじやぶ じやぶじやぶ じやぶじやぶ おじやぶのじやぶじやぶと おせんたくをしました。

ライちゃんは家の前へ出て雲の切れ目から下をのぞいて見ました。

「あや、よく見えるな、やあ、幼稚園だな、たくさんあそんでら、百人も居るかな」

お母さんが心配をして、

「ライちゃんや、あぶないよ、あまり遠くの方へ行くと雲の上からおつちますよ」

「母さん、大丈夫だよ、遠くへ行かないから」

「やあ面白いな、唱歌を歌つてゐら、ながなか上手だな」

「あや、面白いぞ今度は遊戯だな、みんな踊つてゐら、赤いべし着て傘さして」

あまり面白かつたので思はず雲の上で踊り出しました。しますと、どうした拍子か足を踏み外して、そのまゝ雲の上から、真さかさまにズドンと落ちました。落ちたところは大きなお池のまん中でしたから別にけがはいたしませんでした。

けれどもライちゃんは泳げないんですもの、お

水の中でアツブアツブしながら「大變だ、大變だ、たすけてくれ」と云ひながら、お手々をぼちやぼちやしてゐました。秋のはじめてするものお水も冷たくなつてゐます。

×××

×××

×××

そうしますと太郎さんが幼稚園から歸つて來ました、おべんたうを肩の處からスーと斜にかけて、左の手に、お草履袋を持つて「今日は幼稚園で面白かつたな、これからお家へ歸つて、母さんに、おやつをいただいて、うまいな、まてよ今日のおやつは、ミルクキヤラメルかな、おまんじうかしら」と云ひながら歸つて來ますと林のあちらのお池の方から、アツブアツブ、ポチャポチャポチャと云ふ音が聞えて來ます、「なんだらうな、アツブアツブ、ポチャポチャポチャ、だつて」大急ぎでお池へ來て見ますと、まあ、雷様の子供がお池の

中におつちて、アツブアツブ してゐます。

「きのどくだな、よし、僕たすけてやらう。オーイ、今たすけてあげるよ……まてよ、さうださうだ帯をほどいて、」帯をキリキリキリとほどきましたその先に小さな石をグツと結びつけて「イイカイ帯をなげるから帯のはしをつかむんだよ、ソーラヒイ、フウの ミツ」

ポイとなげますと、お池の中程へポチャンとおちました、ライちゃんも帯の端をギューとにぎりました。「引つばるよ、いーかい、しつかりにぎつていなさやだめだよ、いーかい ヒイのフウのミツ、」

へやれ引け そら引

えんやらさ

コラ えんやら えんやら

えんやらさ

やれ引けそら引け

えんやらさ コラえんやら

えんやら えんやらさ

と引つばりますと、ライちやんはだんだん岸の方に汽船が進むやうにお水をツウツウと切つて

と引つばられて來ます、
シユウ シユウ シユウ シユウ シユウ シユウ

「サア今度は早く引つばるよ、しつかり持つてお
うてよ」

へやれ引けそれ引け

えんやらさ

コラえんやら えんやら

えんやらさ、

と引つばりますと、ライちやんの方も早く

シユウ シユウ シユウ シユウ シユウ シユウ

と岸のところまで、やつと參りまして、「お手々を引つばつてあげるよ、ソラ ヒイフウのミツ」と

やつと岸へあがりました、ライちやんはたすけてもらつて大よろこび、

「太郎さんありがたうございました。」

「どうしたの、君、もう水泳は寒くて風邪を引くよ」

「泳いでゐたのではありません、天からおこつたんです」

「君は一體なんだい」

「私は雷様のライちやんと云ふんです、あなた方の幼稚園があまり面白かつたので、つひ踊り出したらお池の中へおつこらたんです、おかげで命がたすかりました、そのお禮にこれをあげませう、これは太鼓です」見ると、小さいきたない太鼓ですもの、

「僕そんなきたない、小さい太鼓なんかいらぬ家にもつと上等の、大きな太鼓があるよ、お禮なんかいしよ」

「太郎さん、この太鼓は、あたりまへの太鼓じやありません、太郎さんのほしいと思ふものを云つてトントコトンのトンとこの太鼓をたゝきますと、ちやんとそれが出て來ます。太郎さんの命令をよく聞く太鼓ですから、とつて、置いて下さいな」

「さうかい、面白い太鼓だね、僕が命令をしてトントコトンのトンとたゝけばその通りになるのかい、面白いな、そんなら僕いたゞいて置かうよ」

「それでは太郎さんさようなら、」

「ありがたう、又遊びにおいでよ」

「面白い太鼓だな、僕のすきなものが出て來い、と云つてトントコトンのトンとたたけばなんでも出て來るんだからな、面白いな、よしミルクキラメルを出してやらうかな、ミルクキラメル出て來い！トントコトンのトン」とたゝきますとミルクキラメルが太郎さんの前へバツと出て來ました、「オホ、ミルクキラメルが出て來たぞ、た

べて仕舞へ」、ムシヤムシヤムシヤとたべてしまひました。

「今度は、おまんじう、よし、今度は大きな大きなすいかよりまだまだ大きい、おまんじう出て來い！トントコトンのトン」とたゝきますと大きな、太郎さんの頭の五倍もあるやうな大きなおまんじうが出て來ました「イヤウ、大きなおまんじう、たべて仕舞へ」ムシヤムシヤムシヤとたべて仕舞ひました。

「よし。今度はサーベル出てこい！トントコトンのトン」とたゝきますと、サーベルが一つ出て來ました。

「ヤア、サーベル、サーベル、おこしにつけて、よしよし、今度は、さうだ望遠鏡だ、今度は望遠鏡出て來い！トントコトンのトン」とたゝきますと、立派な上等の望遠鏡が出て來ました。

「ヨウ望遠鏡、肩からかけて。今度は飛行機を出

してやらう、大きな大きな、上等の飛行機出て来い！トントコトンのトン」とたゞきますと、立派な飛行機がブルブルブルと出て来ました。

太郎さんは大よろこび飛行機にとびのつてだんだん高く飛び出しました。

お山をいくつもいくつも越えた國へ来ますと、大人も子供も鎮守様の前へ集つてわいわい言つてゐます。その内子供たちが歌を歌ひはじめました。

ハ雨　こんこん　降つてくれ

あしたの晩に降つとくれ

あめこんこん降つとくれ

あしたの晩に降つとくれ

「オヤ、あかしい歌だな、『あしたの晩に降つとくれ』だつて、どうしたのだらう」

飛行機をだん／＼低くして、おちて来ました。

「どうしたの、あめこんこん降つとくれ、あしたの晩に降つとくれだつて、あかしいや」

「雨が降らないとお米が枯れて仕舞んですよ、それにね悪い鬼がゐる雨の神様だとか雷さまを夕焼雲の中へおしこめて雨を降らさないやうにしてゐるんです、今日で一月も雨が降らないんですもの、それでみんなが、大さわぎをしてゐるのです」

「エ、悪い鬼が雨の神様や雷様をひどい目に逢はせて、その上お米を枯らして仕舞ふ考へなの、よし僕行つて鬼共をたいじて来るよ」またもや飛行機にとびのつて天の方をさしてまっしぐらに飛び出しました。

空の悪い鬼たちはこれを見て「チャア太郎が飛行機にのつて生意氣にやつて来たな、すぐ王様に申し上げやう」

このことを大王様に申し上げますと鬼の大王様

大變に怒りました。「よしみなものうちにしてしまへ」鬼共は弓に矢をつがへて雲の下の家まで進んで参りました、その勢たら大變です。

太郎さんの方では平氣なものです。「弓なんか持つて來ても平氣だよ」矢があとがへりせよ』トントコトンのトンとやると矢があとがへりをして自分たちのお目目へチクリとささるから面白いな」鬼の王様「よしみなもの弓に矢をつがへて、さあいゝか、あの太郎の胸をよくねらつて、太郎の胸をうて、イチ ニイ サン と云ひますとたくさんの矢が太郎さんの胸の方をむいてとんで來ました。「面白いな、あとがりをして自分たちのお目目をチクリだよ」そろ今飛んで來た、矢はあとがへりをせよ！』トントコトンのトン」

とたくさますと太郎さんの胸の處まで來てゐた矢がクルリとうしろ向きになつてそのまま、もと來た方へブーンと、あとがへりをして、鬼の目を

チク チク チク とつきましたから、鬼たちは驚ろきました。

「ヒヤ、アイタツタツタ、太郎さんごめんない、ごめんない」

みんな降参して仕舞ひました。

鬼の王様はこれを見て、火のやうになつて『よし太郎とやら生意氣なやつだな、こうしてやらう』とそこにあつた百貫もある電信柱の様な大きな鐵棒を、キリキリキリとふりまわして、太郎さんの飛行機へポイツとなげつけました、太郎さんは平氣なもので、

「よし今度は鐵の棒だな、又あとかへりをさせて鬼の王様の頭をコツコツとたゝかせてやるぞ、面白いな、トン トコ トンのトンだよ、面白いな」その内に鐵の棒がブーンと太郎さんの頭の上まで飛んで來ました。

太郎さんは平氣なもので

「面白いな、鬼の王様の頭をコッ コッ コッだ」
 「鐵の棒はあとがへりをして鬼の王様の頭を、コ
 ツ コツ コツとやつてやれ！ トントコトンのト
 ン」とうちますと鐵の棒はブーンとうしろを向い
 てもと来た方へ飛んで行つて鬼の王様の頭を、コ
 ツ コツ コツとうちました、鬼の王様はちどろ
 きました。

「おや、アイタツタツタツタ」しかし王様ですも
 のなかなか降參をいたしません。

「何を生意氣な太郎 なんて降參なんかするもの
 か死んでもおじぎをしないぞ」

とふんどり反つて、おばつてゐます、太郎さんは
 「いやにゐばつてそり返つてゐるな、なに、いまに
 おじぎをさせてやるぞ、トントコ トンのトン
 だぞ」

「おじぎなんかするものかい、ウーン」

「面白いな、おばつても駄目だよ、鬼の王様ペコ

ペコペコとおじぎをして降參をして仕舞へ！ ト
 ントコトンのトン」とうちますと、いばつてゐた
 王様もたまりません。ペコペコペコのペコとおじ
 ぎをして、とうとう降參をしてしまひました。

そこで雨の神様も雷様の母さんもライちゃんも
 みんなたすけ出しました。

雨は一どきにザーと降り出しました。村の人
 たちがどんなによろこんだこととせう。

「お米が枯れないでよかつた、これもみんな太郎
 さんのおかげだ、」と云ふので御褒美に大きい大き
 い勳章を十もお胸へつけてくれましたとさ。

お囃をいたします通り書いて見ました。なほこのお囃は大
 阪、名古屋、東京の三放送局で放送をしたことがあります。

太鼓は玩具の太鼓を實際に打つて見ると面白いと思ひます。

出来るだけリズムカルにやつていたいくと結構です。